

■対談

言葉で
イメージを豊かに
膨らませる

厄介で困った人間を許容する、
寛容な心が大事

●山田 洋次 ・映画監督

●河田 悌一 ・学長

河田学長のかねて依頼していた対談が、実現した。
山田洋次監督は、国民的映画といわれた
『男はつらいよ』全48作のあと
話題作を次々に世に送り出している、日本映画界の第一人者。
スクリーンからしみじみ伝わってくる温かさ、
人間と社会を見つめる確かなまなざしは、どこから来るのだろうか。
2005年から関西大学客員教授を務められている山田監督の話をお聴こう。

◆少年時代を過ごした「アカシアの大連」

河田 山田洋次監督と初めてお会いしたのは、1992年9月に大連で開催された日中国交回復20周年記念のシンポジウムの際でした。その際、作家の陳舜臣さんと一緒に、大連の街をあちこち案内していただきました。というのも、山田先生のお父さんが満鉄(南満州鉄道株式会社)の技術者で、ご自身も少年時代を大連で過ごされたからです。あのとき、旧居の懐かしい建物が残っていて、通された部屋に入るなり、「ここは僕の兄の部屋だった」とおっしゃいましたね。

山田 あのところまでは古い街並みが残っていて、昔の面影がありましたね。僕の家も傷んではいたけれど、ドアのノブを握った感触が50年前と同じでした。それから中国はものすごい勢いで変化したから、その後もう一度訪れたときには、あの家は解体中で廃墟みたいでした。

「アカシアの大連」と呼ばれたように、植民地の時代はきれいな街でした。5月には真っ白な花が街中に咲き乱れ、いいにおいが街中に漂うんです。花を口に含むと甘くてね、よくつぶらにして食べました。

河田 そのような暮らしも、敗戦とともに一変したのですね。

山田 貯金も株も何もかも消えたんですからね。僕たち日本人は持っているものを中国人やソ連の軍人に売って食いつなぐばかりありませんでした。僕と兄は、知り合いの大学の先生が所蔵していた本を預かり、道端に並べて売ってそのマージンをもらう、というようなアルバイトもしました。あるとき、中年のおじさんに「この本いくらで売れるの?」と聞かれて、「10円でいいです」と答えたところ、「君、これは『溇東綺譚』の初版本で、たいへん値打ちのあるものなんだ。そんな値段で売っちゃだめだよ」と言われました。永井荷風の有名な小説であることも、初版本に価値があることも、中学2年の僕は初めて知ったんです。残念ながら、その人は買ってくれませんでしたけどね(笑)。

◆記録し続け、語り継ぐべき「歴史」

山田 敗戦2年目の冬でした。引き揚げ船に乗って大連の港を離れるとき、ソ連の将校が一人、雪の降る岸壁で手を振って見送ってくれたんだけど、デッキの日本人は今までベコベコしていたのに、声高に「ばかやろう、今度会ったらただじゃおかないぞ」などと、悪口を浴びせていました。ところが、博多に着いたら岸壁にアメリカの兵隊がずらっと並んでいる。アメリカ兵はソ連兵よりうんとスマートでカッコよく、圧倒されました。その冷たい目を見ていると、ソ連のやぼったくて人なつこい兵隊たちが懐か

しくなったりして…。僕たちは大きなリュックをかついだ、言ってみれば難民ですからね。この国でも、また大変な暮らしが待っているんだなあとがっかりしたものです。事実、そうでしたものね。
河田 吉永小百合さん主演の新作「母べえ」は、今の学生には暗い時代の陰気な話のような印象を与えるようです。しかし、戦中・戦後に苦労された、監督の体験がこういう映画を作らせた、つまり思い残すことなく、気持ちのうえでもきちっと整理し、若い世代に伝えておかなければならないと思われたからではないでしょうか。
山田 僕らの少年時代、日本人は中国人を差別し、劣る民族として見ていました。なんていうひどいことをしたんだという負い目が、僕にはあります。その現実を臨場感をもって語れるのは、僕たちが最後の世代でしょう。歴史をさかのぼれば、日本人は中国の文化の恩恵を受け、その文化圏の中にいるわけですものね。江戸時代の侍は、みんな中国の本を読んで勉強したのでしょうか。
河田 江戸時代の人たちの教養のものは、四書五経を中心とする儒教でしたからね。日本人は歴史を忘れ去り、過去を水に流そうとしがちですが、中国人にとって歴史というのは、記録し続け、語り継がれるべきものです。そういう歴史観の違いを抜きにして、中国の悪いことばかりをあげつらう昨今の風潮は残念な気がします。

◆作り手の思いがスクリーンからにおう

河田 2005年に関西大学へ集中講義に来てくださったときは、日本映画だけでなく、世界の映画の歴史を踏まえ、チャップリンの名作をはじめ、いわゆる名画をさまざまな角度から解説していただき、院生諸君は感激していました。

山田 学生はみんな熱心で、とても授業のしがいがありました。映画の歴史は100年を超えていて、素晴らしい映画がいっぱいあります。それを若い人があまり観る機会がない、というか観ようとしません。映画のクラシックも歌舞伎や文楽と同じで、いい案内人がいると、どんなふうにも面白いのかが理解できる。これは何を意味しているか、どこが見どころなのかを教えられるうちに面白くなっていく。第二次大戦から戦後にかけて、日本人が食べるものも着るものもなくして飢えに泣いていた1940年代に、アメリカ映画はすごい傑作を作っていたことなども分かります。

河田 「文は人なり」と申しますが、文章も映画も同じです。いい映画には、作った人の思いが込められているのを感じます。

山田 一生懸命に作ると、作り手のその思いが画面に漂うのです。スタッフ全員の情熱が、スクリーンからにおう。そういうことを信じなければ、映画は作れません。真剣に作れば、観客に必ず伝わる。

河田 去年の3月、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学で、本学の日本・EU研究センターによるJapan Weekの行事の一環として、監督の『たそがれ清兵衛』など藤沢周平原作の三部作を3日間にわたり上映しました。監督にも参加していただいて、向こうの映画評論家との対談も行いました。500人ぐらいのホールが満席になり、皆さん笑うべきところではちゃんと笑うし、泣くべきところではちゃんと泣くし、最後は立ち上がって大きな拍手。いい映画というのは、国や民族を超えて理解されるものだと思います。

■対談

◆優れた人が愚か者を演じるおかしさ

河田 山田監督といえば、何と言っても「男はつらいよ」。48作に及ぶという驚異的な人気映画でした。シリーズの最後の舞台が阪神・淡路大震災直後の神戸で、主演の渥美清さんはがんが転移してドクターストップがかかっているにもかかわらず、無理を押し出て出演なさったと聞いています。監督にとって、渥美清という俳優さんはどのような方だったのですか。

山田 渥美清さんは、実に優れた人でした。観察力、表現力、論理的な頭脳、柔軟な感性の持ち主、記憶力もすごかったですね。シナリオは全部、暗記していました。あの人がいたから寅さんシリーズが出来たんです。寅さんを演じているこの人は実はすごく頭が良く、優しく人間に対する深い理解力と洞察力があるんだということを、観客は分かるんですよ。優れた人が愚か者を演じ、美人に恋をしてオロオロしたりするから、あんなにおかしかったのではないのでしょうか。

私生活では自分の家に人を呼ぶことは一切せず、スターとして、公人としての渥美清とは徹底して分けていた。最も身近にいた僕でさえ、あの人が亡くなって初めて奥さんと会話を交わしたくらいです。「渥美清の案内です」という電話があり、「昨日息を引き取りました」と告げられました。「家族だけで密葬し、それから山田監督に電話して、よろしくお願いしますと言いなさい」という話になっていたようです。僕が家に伺ったときには、骨壺とお線香の香炉があるだけで、何と徹底した人なんだらうと、僕は呆然としたものです。

◆次作は賢いお姉さんと愚かな弟の物語

河田 来年1月に劇場公開される小百合さんと鶴瓶さん共演の『おとうと』は、山田監督にとって10年ぶりの現代劇だとか……。

山田 寅さんシリーズが愚かな兄と賢い妹という組み合わせだったのに対して、今度は賢いお姉さんと愚かな弟の、おかしくて哀しい物語です。吉永小百合さんのお姉さんにさんざん迷惑をかけた笑福亭鶴瓶さんの弟が、行き場のないホームレスの人たちに最期を提供する一種のホスピスで亡くなるシーンが山場です。お姉さんの娘を蒼井優さんが演じ、セブな男との結婚に失敗し、加瀬亮さんが演じる幼なじみの大工の青年と結ばれる話もからみ、ワーキングプアといわれる人たちも登場します。

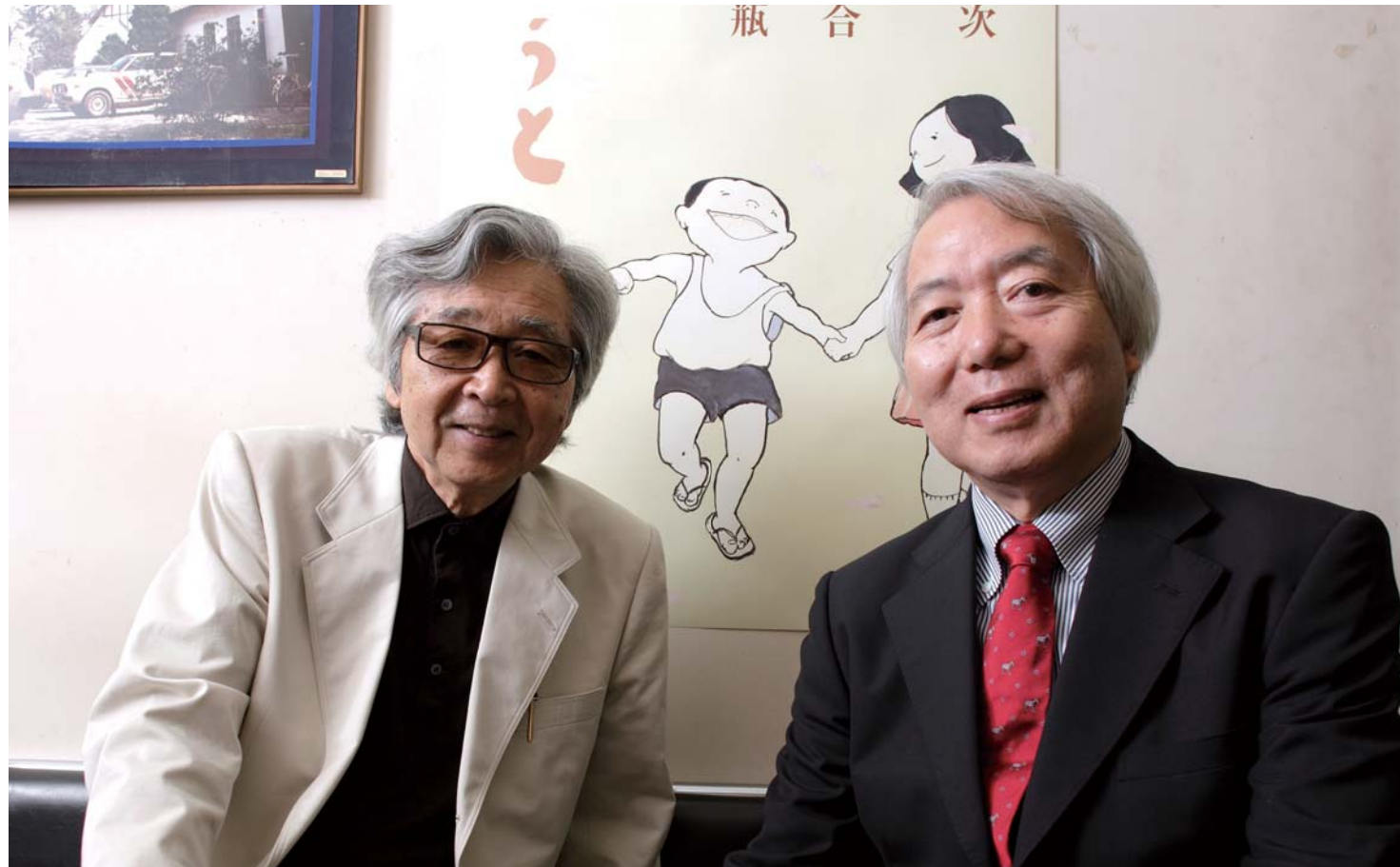
今は見て見ぬふりの、冷たい社会になりつつあります。世界では戦争が続いていて悲惨な死に方をしているお母さんや子どもたちがいるし、日本の国内でも毎年、自殺者が3万人を超えています。自分の国だけ、自分の家だけ幸せになればいいという考え方を直すきっかけになればいいと思っています。

河田 希望とか、ほのぼのとした気持ちというメッセージが、山田監督の作品には一貫して込められているのを感じます。

山田 「ああ、困ったやつだな」という人間が地域や家族には常にいる。でもやっぱり彼あるいは彼女も家族の一人、地域の住民の一人、あるいは学校の生徒の一人だと受け止めて許容するというような、寛容な気持ちが今の日本に欠けている。一緒にやっていくしかないなあという、あれが来ると問題が起

反対や非難があったり、わいわい言い合いながら、
どうにかこうにか話し合っ
て進んでいくというのが、
集団のあり方ではないかと思うのです。

「文は人なり」と申しますが、
文章も映画も同じです。
いい映画には、
作った人の思いが込められているのを感じます。



山田 洋次 (やまだ ようじ)
1931年大阪府生まれ。2歳から15歳まで旧満洲(中国東北地方)で過ごし、1947年に大連から日本に引き揚げ、山口県宇部市に住む。54年東京大学法学部卒業、松竹入社。助監督を務め、61年に「二階の他人」を初監督。「下町の太陽」、「馬鹿まるだし」などに続き、69年から95年まで渥美清主演の「男はつらいよ」シリーズ48作品を監督。他の代表作として「家族」、「故郷」、第1回日本アカデミー賞監督賞ほか6部門受賞の「幸福の黄色いハンカチ」、「息子」、「学校」など。2002年より藤沢周平原作の「たそがれ清兵衛」「隠し剣 鬼の爪」「武士の一分」、08年「母べえ」。96年紫綬褒章受章、04年文化功労者に選出。現在、関西大学客員教授。日本芸術院会員。「山田洋次作品集」(全8巻)など多数の著書がある。

河田 梯一 (かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省中央教育審議会臨時委員。同省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会副会長。独立行政法人日本学術振興会大学教育等推進事業委員会委員。著書に「中国近代思想と現代」「中国を見つめて」「書の風景」など。



「おとうと」(山田洋次監督・最新作)
監督：山田 洋次
主演：吉永 小百合、笑福亭 鶴瓶
©2010「おとうと」製作委員会
2010年1月全国公開



ベルギーのルーヴェン・カトリック大学で開催された山田監督作品の上映会と対談

きちゃうけど、しょうがないじゃないか、あれも仲間なんだからみたくない……。寅さんもそういう男です。人間というのは厄介な存在なんです。いつも穏やかに、全員一致で物事が進むわけじゃない。反対や非難があったり、わいわい言い合いながら、どうにかこうにか話し合っって進んでいくというのが、集団のあり方ではないかと思うのです。「一糸乱れず」というのは、むしろ良くない。

◆図書館で勉強する「美しい学生」であれ

河田 孔子のような偉人も、当時の弟子に苦言を呈したりしています。確かに今の学生には問題も多いけれど、彼ら、彼女らにはいいところがあるのです。例えば、人のために何かしたいというも思っている。だから、地震が起こったら被災地に駆けつける。高校や中学校の教員になるための介護実習などもきちんとやる。私たちの世代だったら高齢者施設で介助などできなかったと思いますが、今は若い男性の看護師も増えています。それぞれの時代、それぞれの良さがあるはず。それを伸ばしていきたいと考えています。

山田 監督は藤沢作品の前には、教育をテーマにした『学校』というシリーズをお撮りになっています。

山田 どんな先生に巡り合えるかで、一生が決まるんですよ。それほど先生の仕事というのは大事です。

河田 私はこの年になって、先生というのはなんといっても聖職だ、と思うようになりました。小中学校や高校の先生だけでなく、大学の先生もやっぱりある意味で聖職だと思います。

山田 何か悩みや相談ごとがあって教授のところへ行くと、カウンセラーに回されてしまうという話を聞いたことがあるけど、それじゃ何のために教授がいるか分からないじゃないですか。

河田 最後に、関西大学の学生に何か言葉を贈っていただけますか。

山田 僕はこの大学の図書館の立派さに驚きました。日本でも有数の大学図書館だそうですね。ルーヴェン・カトリック大学でもそうでしたが、図書館で学生が本を読んだり、調べたりしている姿を見ると、いいなあと思う。こっちまで幸せになりますね。広大な図書館を自分の書庫のように自由自在に利用できるわけですから、僕も学生時代に戻れてたっぷり時間があれば、朝から晩まで入り浸りになって勉強するのになあ。図書館で勉強する、美しい学生であってほしいと思います。本を読むことに夢中になるのは、とても大事なことです。

河田 本を読めば、考えないわけにはいきませんね。

山田 そして、イメージを豊かに膨らませることができるのです。イメージを作る映像の勉強は、まず文字で表現することが必要です。どんな映像かを、言葉で表してみる。言葉できちっと説明できない人は、的確な映像だって作れない。正確な言葉を使う訓練には、何とんでも活字を読むことが一番です。図書館を利用して、大いに本を読んでほしいですね。

河田 どうぞ自愛のうえ、これからも心にしみる素晴らしい映画を撮り続けていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。